

手足の不自由な子どもたち

はげみ

令和元年度 / No.388

10/11

October—November

特集
芸術・文化活動



第37回肢体不自由児・者の美術展入賞作品『明るい気持ちと暗い気持ち』
森川 柁稀 (17歳)



はげみ

令和元年度
10・11月号

はげみ通巻388号



目次

ごあいさつ	遠藤 浩	2
広場 肢体不自由児・者の創作活動の広がり	三室 秀雄	4
特集 芸術・文化活動		
総論 生涯学習につながる全校を挙げての芸術活動		
～「光美展」「光書展」二つの全校表彰アクション～		
事例1 目指せ特賞「肢体不自由児・者の美術展」	田村康二郎	6
事例2 成人しても創作活動を続ける理由	山田萌々華	13
事例3 成人しても創作活動を続ける理由	大橋 一真	18
事例4 視線入力してくれた「目で絵を描く」という選択肢	廣田 琉花	21
事例5 デザインと僕	瑞慶山 良	25
	山口 飛	
事例6 書の活動について	西里 俊文	31
事例7 写心と共に生きる～PHOTO LIFE～	久万 重仁	44
第37回肢体不自由児・者の美術展／デジタル写真展 特賞受賞作品の紹介		52
今号の表紙	森川 柁稀	62



広場

肢体不自由児・者の創作活動の広がり

東京学芸大学教職大学院 特命教授

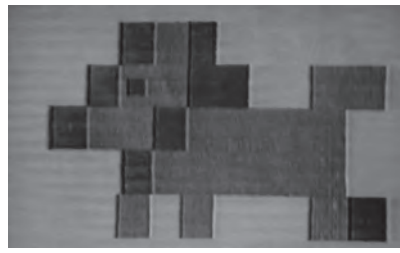
三 室 秀 雄

私は、日本肢体不自由児協会が主催する美術展の審査委員を務めていたことがあります。会場いっぱい作品が飾られ、その中から全国特別支援学校肢体不自由教育校長会賞（以下、校長会賞）を選ぶ審査を担当しました。細かく描かれた絵、力強い書、丁寧に描かれたコンピュータなど、どれも素晴らしい作品ばかりでした。小学生から高齢な方までいろいろな年齢の方の作品が同時に飾られていました。校長会賞なので学校に在学している方を選びましたが、子どもたちが将来、この美術展に出品されていた高齢の方のように、作品作りを続けられたら素敵なことだと思いました。

子どもたちは表現する力をもっている

私が養護学校（特別支援学校）に勤めていたとき、美術の先生から「手を支えていると、この子は絵を描けるような気がするのです」と話しかけられました。当時、コンピュータを使って文字指導などをしていたので、さっそく絵

を描くためのプログラムを作ってみました。3つほどのスイッチを押し分けることができたので、下に動く・横に動く・決定をする（色を塗る）スイッチを用意して、画面を塗り分ける指導をしました。4つに分割された画面の塗り分けから始めて、だんだん画面を細かく分割し絵を描けるようにしました。話すことができない生徒でしたので、授業になると足をバタバタさせてやりたい気持ち伝えてくれました。図表1はその子どもが描いた「ライオン」の絵です。こんなに素晴らしい絵を描いてくれました。この作品は、隣の中学校との交流会のプレゼント用のしおりのデザインに使いました。絵を描いている途中で足をバタバタさせて、嬉しそうにプリンターの方を見るように合図を送ってきたことがありました。



図表1 ライオン



「どう見てもまだ作品はできていません。「どうしたの?」と聞いても、嬉しそうに足をバタバタさせています。良くわからないままプリンターで印刷すると、逆さに描かれた「家」の絵が印刷されてきました。逆さに絵が描けることにも驚かされました。表現手段を工夫すれば、子どもたちの可能性が大きく広がることを教えてもらいました。」

卒業生から届いた案内状

養護学校に勤めていたときの卒業生から「二人展」の案内状が届きました。案内状には、2匹の猫が描かれています。1匹はタイプライターで描かれた猫で、もう1匹は写真に写った猫でした。かわいい猫の横に「このたび二人展を開くことになりました。ぜひ、見に来てください」と書かれていました。会場は商店街の喫茶店、素敵なタイプアートと写真が飾られていました。2人は同級生で、2人とも日本肢体不自由児協会で行われている美術展で入選したことがあります。会場にいた方と話しながら作品を見てみると、カメラを持った卒業生が来てくれました。車椅子にカメラがついており、いつでも手元のスイッチを押すと写真撮影できるようになっていました。「肢体不自由児者の美術展で入選してから、区的美術展に作品を出しています」とニコニコ笑いながら話してくれました。「区的美術展で入選すると、表彰式で他の入選した方と会います。みんな車椅子の僕を見て、驚くのが楽しみなんです」彼の笑顔の中に創作活動への自信を感じました。タイプアートの作品を作っている卒業生には、養護学校時代の先生が、今も支援してくれました。電動タイプライターが製造

中止になってからは、その先生の支援を受けてコンピュータを使って作品を作り続けていました。2人の活躍の様子を見ながら楽しい時間を過ごしました。

令和元年7月8日、文部科学省から「障害者の生涯学習の推進方策について（通知）」が出されました。学校の学びを生涯にわたって学び続けられるような社会づくりが求められています。日本肢体不自由児協会では、昭和57年から「肢体不自由児・者の美術展」を開催してきました。美術展には、何年も応募を続けていらつしやる方もいます。この特集では、美術展に応募されている方や審査を務めている方々に創作活動に取り組むに至った経緯や創作活動への想い、意義を執筆していただきました。また、平成30年度肢体不自由児・者の美術展／デジタル写真展の作品も紹介しています。近年、情報機器の進歩により、視線入力で（目を動かすことで）絵を描くことが可能になりました。子どもたちの夢は、大きく広がる時代です。この特集を通して創作活動に取り組む方々や創作を続けていく方々が增えること、またサポートしてくださる方々が増えていくことを願っています。